

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	中村 美代子
論文審査担当者	主 査	政策・メディア研究科委員 環境情報学部教授	今井 むつみ
	副 査	政策・メディア研究科委員 環境情報学部教授	霜崎 實
		政策・メディア研究科委員 環境情報学部教授	中浜 優子
		名誉教授	石崎 俊
学力確認担当者：			
<p>中村美代子氏から提出された博士論文は、Phonological Representations of the Japanese Language: Levels of Processing and Orthographic Influences（日本語の音韻表象：処理のレベルと正書法の影響）と題し、5章から成る。</p> <p>【論文審査の要旨】</p> <p>日本語の音韻表象に関し二つの研究により、音声に対して最も注意が払われる音韻アウェアネスのレベル、音声に注意を払わず受動的に音声进行分析する前注意段階、それぞれの音声処理レベルで用いられる単位、及び、正書法の影響を明らかにした。従来は研究対象とされなかった音素も含め単語以下の音韻表象を、日本語とアルファベットの双方の書字体系を獲得している成人の日本語母語話者について、認知心理言語学的実験により検証した。</p> <p>第一の研究（第3章）は、実験で参加者に「聞こえてきた音声の順番を逆さにする」反転課題を行うことを求め、音韻アウェアネスレベルでの単位を検証した。結果は自発的な反転を求められると音素や音節と比較してモーラが最も優勢な単位であることを示した。一方で、参加者は要求に応じて音素の反転が完璧にできた。しかしながら、参加者の内省報告によると、大多数の参加者はかな文字の交換という方略を使っていた。これはかな文字の中を子音と母音の構成要素に分析する能力を示唆している。最初に獲得した書字体系の性質が母語話者の音韻アウェアネスの処理に強く影響を及ぼす一方で、そのような言語固有の処理が音素レベルでの音韻の操作をするアウェアネスを示唆していることが明らかになった。</p> <p>第二の研究（第4章）は、日本語の音声分節の機能的な単位を、両耳異音聴による提示で注意を払わない受動的な聴取による検知課題を用い、音素、モーラ、又は音節が一方の耳から他方の耳へとマイグレーション（移行）が起こった結果、単語を錯聴するかその度合いを測るという実験で明らかにした。参加者はひらがな又は漢字で提示されたターゲットを検知し、音節、及び特にモーラによる錯聴が最も多かったが、音素レベルでの錯聴も起こり、正書法からは独立した単語以下の構成要素が音声分節の際に役割を果たしていた。このような結果は次の実験でのフランス語母語話者には観察されず、日本語母語話者の音声分節を反映している。更に漢字の心的表象の介入をなくすべく、カタカナでしか表わされない外来語をターゲット語として提示する実験を行ったところ、再度音素レベルでの錯聴が起こり、音節はモーラと同様に錯聴が起こった。これらの結果により、注意を払わず受動的に音声进行分析する前注意段階に於いては、複数の単位、すなわちモーラ、音節、及び音素も、正書法の知識から独立して機能していることを示唆して</p>			

いる。

これらの基礎研究の役割としては、日本語母語話者に対する外国語のアルファベット綴りの学習や教授を容易にすること、またその応用としてコンピュータによる学習支援に貢献することである。また、一方で文字の読み書きが困難な難読症の人々の検査や支援に貢献することが期待される。

以下に、本論文における各章の内容を要約する。

- 第1章 序論として、本研究の核となる概念、目的、アプローチ、論文構成について述べた。
- 第2章 本研究の背景を、日本語の音韻と書字体系、言語的アウェアネス、音声分節のそれぞれについて詳しく、関連する先行研究を挙げて述べた。
- 第3章 日本語の音韻アウェアネスレベルでの単位を検証した3つの実験について、目的を述べた後、それぞれ、実験方法（参加者、実験材料、実験手順）を詳しく述べ、次に実験データを統計的に分析した結果を掲げ、考察を述べ、最後に全体を考察した。
- 第4章 日本語の音声知覚で、注意を払わず受動的に音声进行分析する前注意段階に於いての機能的な音声分節の単位を検証した3つの実験について、全体の枠組、及び目的を述べた後、それぞれ、実験方法（参加者、実験材料、実験手順）を詳しく述べ、次に実験データを統計的に分析した結果を掲げ、考察を述べ、最後に全体を考察した。
- 第5章 二つの研究から明らかになった結論を述べ、更に研究の応用可能性と今後の展望を述べた。

本研究の成果および特徴は、下記のように要約できる。

- ・「音声処理レベル」のモデルを、注意を基軸として捉え、「日本語の音韻表象」については初めてその妥当性を検証、また「正書法や書字体系の影響」を実証的に明らかにできた。

- ・日本語母語話者成人の自然な音韻アウェアネスの単位が何かを初めて検証し、従来の研究で日本語母語話者成人については扱われることがなかった音素のアウェアネスも実証的に明らかにできた。

- ・日本語母語話者成人の音声知覚における音韻表象の基本的な単位、及び正書法や書字体系の影響を検証したことに理論的な意義がある。日本語の音韻には「音節は存在しない」という説もある中、「音節は実際存在する」ことを実証的に示し、日本語の音声知覚の基本的な単位に対する、この分野での言語横断的な長い間の論争に一つの答を与え、長年必要とされていた新たな展開をもたらした。

- ・二つの研究は、共に、人間の音声処理や文字獲得の研究を専門とするブリュッセル自由大学の研究者との共同研究に基づき、UNESCOのHuman Frontier Science Programの研究支援を受け、分野をリードする数カ国の研究者達との交流を介してなされたものである。

本研究は、中村美代子氏が高度な研究遂行能力と当該分野における豊かな知識を有すると共に、海外の研究者との活発な議論を通じて、国際的に通用する研究を実施したことを示すものであり、その研究成果は単に認知心理言語学のみならず教育場面、医療場面への応用を含めて、今後の発展への大きな貢献が期待できることを示している。よって、本学位審査委員会は、中村美代子氏が博士（学術）の学位を受ける資格があるものと認める。